

港北の消防

第57号

平成29年10月1日
編集
横浜市港北消防団
(港北消防署内)

小型ポンプ操法を通して

第三分団 第五班 池田 昌訓

この度、私は小型ポンプ操法において一番員を任せられる事となりました。一番員はとにかく全力で走るの体力が必要とのこと。班の中で年齢が一番若く操法未経験だった私に、班長は一番員を託したのだと思います。何も考えず二つ返事で「ハイ」と答えた私ですが、ポンプ操法自体をよく分かっておらず、やってやれない事はない等と考え、割りとう安易な気持ちでいました。



しかし、四月から町内会館で練習が始まり、五月からは日産スタジアムで本格的な練習がスタートしてみると、思いの外できないどころか、一つの動作を覚えるのに驚いた動作を忘れていた始末、ホースの展開も真っ直ぐいかず、何度やっても上手く行きません。自分では細かい動作を覚えたいと思っ

ても全体を通しての練習が多くなり、この時期になると実家が農家の我が家は毎朝四時に起きて野菜を収穫しなければならず、一年で一番多忙な時期となり時間的に余裕も無く、動作の確認もままならず、覚えたくても覚えられない葛藤を拭えずにいました。そのような中でも練習に行けば、班や分団の方々は諦めず何回も1つ1つ丁寧に動作等を教えて頂き、徐々にですが形になってきました。班の先輩の方々のサポートもあり三分団の訓練会では一通り披露する事ができました。この頃より班や分団の方々と接する機会が増え、団結力が強まって行くのをひしひしと感じました。

その後も本番に向けてひたすら練習を続けましたが、いざ本番では自分のミスも重なり結果は四位。三位と同点の四位。たった1点で入賞を逃した悔しさと後悔の念が後から後から込みあげ、一生懸命サポートして頂いた班や分団の方々に申し訳ない気持ち一杯になりました。ただ、今回のポンプ操法を通して学んだ事は何と云っても「節度」だと思えます。第三分団の方々が、常々口にして頂いていた「節度」という部分では、今負けではないかと自負しております。

今後、操法等消防活動を人に教える機会がもしあれば、消防団とは「節度」と自信を持って言えるように自分自身も節度も持って行動して行きたいと思えます。

「小型ポンプ操法は、火点という標的を目標けて放水します。消火に至る過程で、「自助・共助」という考えが凝縮されていると思えます。まさに「市民の生命と財産を守る」年齢・職業・性格等の違う人たちが、同じ目の為に活動するのですから、仲間との交流が面白いわけがありません。人の顔が違うように、ふたつとして同じ(自然)災害が起きることは百パーセントなといわれています。それぞれの災害に対応できる様、団員の諸能力の向上に努めていきたいと思えます。港北消防署には、「消防団係」があり今後も協力して活動したいと思えます。

消防器具置場 建て替えについて

第一分団 第四班 班長 広田 信治

第一分団第四班は、小机町の西側で緑区と都筑区との境にある大堀町内会地域で警備消防活動を行っています。

現在の器具置場は、昭和五十三年四月に建てられ、既に四十年近く経っています。雨漏りもひどくなっている修繕工事の依頼も考えられていたところ、消防局から器具置場建て替えの話があり、渡りに船という思いでした。

建替中の積載車や資機材をはじめ、諸先輩達から引き継いでいる物品の整理やこれらを一時収納、管理する場所見つからず困惑していました。すると、港北消防所消防団係から連絡があり、港北消防署小机出張所の敷地内にパイプ式車庫を設置して頂き倉庫の角も借りする事が出来ました。

器具置場の片づけと移動については、団員のほとんどがサラリーマンの為、土曜日、日曜日に作業してもらいました。解体工事については、現在の器具置場の所有が大堀町内会という事もあり、町内会に解体工事のお願いをしました。

七月上旬に器具置場の場所が更地になりました。入札から建替完成まで、約半年かかると聞いています。

十二月の年末消防特別警備は、新たな器具置場で行えたいと思えます。そしてまた、新しい器具置場で気持ちも新たに消防団の基礎的諸能力の訓練や地域の消防団活動に努めたいと思えます。



港北消防署及び消防団による連携訓練

第二分団 第四班 菅原 武彦

平成二十九年三月十八日、港北区の篠原西町公園にて、港北消防署及び第二分団による連携訓練が行われました。

訓練前半では、参加された住民の方々を対象に公園内にある消火栓や消火器の取り扱い等を説明しました。訓練用の消火器を使用し、災害時に住民の方々が自ら初期消火を出来るようにレクチャーを行いました。



最近、国内外で多発している自然災害のせいか、住民の方々の防災に対する意識の高さを感じました。後半では、港北消防署と第二分団との連携訓練を行いました。

斜面地に作られた公園の中腹に、住宅密集地内での火災を想定した火点を設定、頂上側から第一班が狭い通路を下り、防火水槽に到着して放水活動を始め、ふもと側からは第二班が消防車で火元近くまで登り、逆延長したホースを消火栓に繋ぎ放水、最後に一斉放水をするというものです。

普段、機関員を担当する事が多い私は、当日も第一班の機関員を担当しました。機関員はそれほど難しい事をする訳ではないと思っ

消防団について

第三分団 第六班 班長 清水 康男

私は、町内会の役員に誘われ、月一回の「定例会」というものを見学・参加させて頂いたのが消防団との関わりが始まりでした。特殊な人たちが、何らかのつながり組織しているのだろうくらいに思っていた「消防団」。

数か月が経ち私は、入団しました。十八歳以上なら一般人でも入団できることに本当にびっくりしました。消防団に入団して十七年になりますが、入団した年に「小型ポンプ操法」という訓練を受け、消防団の何たるかという意味が理解できたと感じています。



「小型ポンプ操法は、火点という標的を目標けて放水します。消火に至る過程で、「自助・共助」という考えが凝縮されていると思えます。まさに「市民の生命と財産を守る」年齢・職業・性格等の違う人たちが、同じ目の為に活動するのですから、仲間との交流が面白いわけがありません。人の顔が違うように、ふたつとして同じ(自然)災害が起きることは百パーセントなといわれています。それぞれの災害に対応できる様、団員の諸能力の向上に努めていきたいと思えます。港北消防署には、「消防団係」があり今後も協力して活動したいと思えます。

子どもたちと考える「消防団って何?」

第四分団 第一班 班長 垣中 祐二

私たちの担当区域にある北綱島小中学校は、防災・減災に力を入れている学校の一つです。毎年四年生が、消防署・消防団について一年を通して学習しています。綱島出張所の見学に始まり、消防小屋の見学・資機材についての学習。私たちも消防団員として、授業に参加し

日頃の活動や、子どもたちの疑問に答えます。「消防団って何?」「消防署があるのに消防団は必要?」「純粋な疑問が授業では飛び交います。」そして消防団に入ったの。「私自身、自ら消防団に飛び込んだ一員ではないため返事に窮します。私は、広島で生まれ育ち綱島に移り住んで四半世紀。その間に、縁あって多くの地域の方と触れ合い、地域の方がたに、育てていただきました。この街を、そして私を育ててくれた人々を、できれば自分で守りたいから。こんな風に答えています。子どもたちは、一年間で消防団に対する考え方が飛躍的に変化していきます。

最終的には、毎年「消防団は絶対に必要!」「自分も大きくなったら消防の仕事や消防団に入ってみよう!」「今、自分たちにできることは何か?」先生方が誘導しているわけではないのです。自分にとっての地域、地域の中での自分。子どもたちが、真剣に取り組んで導き出した答えです。消防団に限らず地域のために、自分に何が出来るかを考えることは、とても大事なことだと思えます。

消防団の年齢構成は幅広いので、もしかすると、近い将来この子たちと一緒に地域のために働けるかもしれません。そんな日が早く来ないか、とても楽しみにしています。

そして、この子たちに、安心して暮らせる街を、将来手渡すために、今後も努力していきたいというつも考えさせられます。

「消防団員の皆さん、一緒に頑張りましょう!」



港北消防団夏季訓練会参加

第五分団 第三班 野間 圭策



平成29年八月六日、港北消防団夏季訓練会に小型ポンプ操法の一番員として参加しました。五月下旬から約二カ月間にわたり、精一杯訓練をしました。訓練の最中は、

こんなに沢山の動きや号令を覚えられるのかと不安でいっぱいでした。訓練をしていく中で少しずつ覚えていき形にすることができましたが、タイムをよくしようと焦るあまり、細かい動作などが抜けてしまうこともあり、結局最後の練習まで「本番でちゃんとできるのだろうか?」と不安で仕方ありませんでした。しかし、沢山訓練も重ねたし、もつ後はやるだけだ。と気持ちを切り替えて本番に臨みました。

訓練会当日は、これ以上ないくらい晴天で、気持ちも高まりました。操法が始まると頭が真っ白になりましたが、沢山訓練をしてきたおかげで体が自然と動きました。始まってしまうとあっという間に終わってしまいました。反省する点は沢山ありましたが、とりあえず訓練したことを全て出し切ることができ、清々しい気分でした。結果はともかく、今回の操法参加がきっかけで色々なことを覚えることが出来ました。いつ起こるか分からない火災の現場でこの経験が役に立てば良いと思います。

小型ポンプ操法競技出場の記事

第六分団 第五班 班長 松原 亮

八月六日に、港北消防団七十周年記念夏季訓練会が行われました。それまでの数日は過ごし易かったのですが、打って変わった猛暑の中でこの訓練会となりました。

我が班は、この訓練会の小型ポンプ操法で第六分団の代表として出場すると共に、十月十四日に行われる横浜市の大会に港北区の代表として出場するチャンスを得る事が出来ま

した。週一回の練習日しか設ける事が出来ないハンディを抱えながら、メンバー全員が真摯に練習に取り組んできたつもりです。ただ、水を出しての練習を始めたのがほんの二週間前という未完成の状態での出場であったか?という不安をメンバー全員が持つておりました。また一方で、出場するからには少しでも良い結果を出したいと思っていた事も事実です。



不安と緊張と期待を交えて臨んだ本番は、思わぬところでのミスもあり、「メダルには届かなかった」と思っておりましたが、意外にも三位入賞を果たす事が出来ました。今度は、いよいよ市の大会です。今回見つけた各メンバーそれぞれの課題を克服すべく、一層練習に励んでいきます。そして、更に大きな成果を持って帰りたいと思っています。応援してくれた皆さん、有り難うございました。そして、これからも宜しくお願いします。

小型ポンプ操法大会に出場して

第七分団 第五班 今井 裕介

平成29年八月六日、シリジリと照りつける真夏の太陽の下と、焼けたアスファルトの上で、港北消防団夏季訓練会が開催されました。開催場所は昨年と同じく交通局新羽車西基地。今回は七十周年という記念すべき大会です。

小型ポンプ操法大会。我が班は、前回出場した六年前の大会時から、平均年齢は八歳アップして四十八歳。出場した七チーム中、一番目の高齢チームです。一・二・三番員は今初めて出場するメンバー。私は前回の大会ではタイムの記録係と出場メンバーのお手伝いでしたが、今回は一番員に選ばれてしま

いました。膝と腰に不安を抱えてのスタートです。

新羽消防出張所の柴田所長、第七分団小山訓練部長の指導の下、農業専用地区の道路を借りて行われた練習は毎週一回、四月から始まりました。しかし、普段はまったく運動をせざる車移動が基本ですから、体がなまっていて、若い頃のように軽快な動作ができません。雨による練習休止が何度かあり、二週間近いプランクがあると前回の練習で出来たことをミスしたり、ひとつ上手いくと別で失敗をしたりと、一進一退のような状況。頭では解っているつもりでも体が思うように動かず、もどかしい思いをすることも多々ありました。

それでも七分団の皆さんや町内会の皆さんのご支援を得て、班一丸となって練習を重ねて、何とか形になってきて迎えた大会当日。頑張っただけでしたが、やはり加齢には逆らえません。一番員は放水開始までのタイムに大きく影響する役割なのですが、元々足が速くない上に軽い膝痛も重なり、納得のいく走りではできませんでした。また、火点への放水方法が現場で急に変更になり戸惑ってしまったりして、競技結果は下から二番目。とても残念な結果となりました。しかし今回、ポンプ操法という技術を習得できたことは、我が班にとつての貴重な財産、有益なスキルになりました。

消防署や出張所の多い都市部では、消防団によるポンプ操法の出番は少ないのが現実だと思えます。しかし、いつか来るであろう大規模災害への備えや、消防組織としての練度と安心感を地域の方々へアピールするには有効なツールです。今回の経験を生かして今後の活動に役立てていきたいと思います。



七十周年記念 夏季訓練会に参加して

第八分団 第五班 道川 宏美

八月六日(日)、消防団に入団して初めての訓練会を迎えた。数日前までは過こしやさい気候だったが、参加するみんなの気持ちを代弁してか当日は晴天に恵まれ、まさに夏真っ盛りの気候であった。バテそうになる体力を気力で補いながら「成功させるぞ」という強い気持ちで臨んだ。観客が大勢集まり緊張感も高まっていった。

私が消防団に入団したのは五月、仕事先で消防団の活動を目的の当りにしたのがきっかけだった。何人かの消防団の方との話の中で、「私は自分や旦那、家庭のために活動している。」「私は地域のために活動している。やりがいを感じている。」など理由は様々であるが、『地域に貢献する気持ち・生きがい』に感銘を受けたからだ。

この日のために私達は何日となく練習を重ねた。不揃いな小さな葡萄の粒がやがて形の良い大きな立派な房になるように、回を重ねるごとに私達は上達していった。練習の大切さ、集団で動くことの意味を私は理解していった。災害が起こった時の消防団の動きで救助に大きく影響するということも感じ取っていった。

今年には港北消防団七十周年という区切りの年でもあった。サプライズ企画も用意した。本番まで秘密裏に行われた内容である。それは七十という数字を旗にして、それをみんなが表示するものである。タイミングが大切なことも緊張する動作である。今までにない発表に試行錯誤を重ね、みんなで動きを確認していった。最後の最後まで入念に調整が行われ、体に染みついていった。

いよいよ発表である。「全員、前へ進め。」の号令で一斉に緊張が高まり、気合が入る。表情が引き締まり、今までの練習が成功

することを祈った。無事終了。みんなホッとした面持ちである。私は「もう少しこうできれば...」と悔しさが混じっていた。団員の「綺麗に揃っていたよ。」という声に嬉しさが込み上げた。

これからどう地域に貢献していくか、自分なりの模索が始まった訓練会であった。

伊藤相談役 瑞宝単光章 受章

受章

伊藤武夫港北消防団相談役が平成29年五月瑞宝単光章を受章されました。

伊藤相談役は、昭和四十七年に入団、班長・分団長・本部部长・副団長・消防団長を歴任され、四十以上に亘り港北消防団の発展と地域の防災活動に努力・貢献されたことが認められ、今回の栄えある受章となりました。



伊藤武夫港北消防団相談役ご夫妻

加藤副団長 藍綬褒章 受章

受章

加藤副団長(港北の消防 編集顧問)が藍綬褒章を受章されました。

加藤副団長は、昭和五十五年に入団、班長・分団長・本部部长・副団長を歴任され、約四十年に亘り港北消防団の発展と地域の防災活動に努力・貢献されたことが認められ、今回の栄えある受章となりました。



加藤副団長ご夫妻

港北区内の火災情報 平成29年9月28日現在

火災発生状況	平成29年9月28日現在		
	平成29年	平成28年	増△減
火災発生件数	55	41	14
建物	24	18	6
林	0	0	0
車	0	0	0
船	5	3	2
航空機	0	0	0
その他	0	0	0
焼損床面積	26	20	6
焼損床面積	211	235	△24
死者	5	1	4
焼死	5	1	4
放火自殺	0	0	0
負傷	0	10	△10

主な出火原因	平成29年9月28日現在		
	平成29年	平成28年	増△減
1 放火(疑いを含む)	25	18	7
2 たばこ	9	1	8
3 こんろ	3	7	△4
4 電気機器	3	1	2
5 スト	3	1	2

編集後記

消防団にとって、夏季訓練会が最も重要な行事です。各分団春先から、ポンプ操法を通じて消防活動の基礎となる所作・技術をしっかりと正確かつ迅速に放水に至るかを訓練してきました。今回はこれに対する団員の心意気が伝わってくる記事も多く投稿して頂きました。また、そのほかの記事では、地元住民との連携など活動の一端を紹介して頂きました。これにより、地域社会の消防団に対する理解が更に深まる事を願っております。関係者の皆様に感謝申し上げます。(砂田)

第十九期編集委員

本	本	部	部	長	長
部	部	部	部	部	部
第一分団	村田 庸明	第二分団	砂田 俊彦	第三分団	吉田 亮一
第四分団	黒川 亮一	第五分団	池田 剛	第六分団	山本 忠夫
第七分団	中山 悦子	第八分団	畑野 悦子		